刺客の花道

森村誠一

文春文庫

文春文庫

刺客の花道

定価はカバーに表示してあります

1991年10月10日　第1刷

著　者　森村誠一

発行者　豊田健次

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-719109-1

文春文庫

刺客の花道

森村誠一

文藝春秋

〈目　次〉

刺客の花道　7
大道の花　49
猫の仇討ち　79
魔犬斬り　107
陰火の武士　137
鯉刑（りけい）　159
鷽替（うそ）え勝負　195
水切りの妖剣　231
とどめ香（こう）　257
罠の生き餌　293

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

刺客の花道

刺客の花道

一

朽木主膳は賭場を出たときからいやな予感がしていた。周囲は寝静まった武家屋敷と黒々とした森に囲まれた寺社ばかりである。後方から一定の間隔を保ったままひたひたと足音が尾けて来る。頭上に月のない暗い厚ぼったい空がある。江戸の闇が一際濃く感じられる夜である。

主膳はその足音から三人乃至四人と判断した。いずれ賭場に飼われているゴロンボ浪人であろう。彼らの狙いはわかっている。

主膳は懐中のずしりとした重量を懐ろ手で揺すり上げた。

「勝ちすぎたかな」

主膳は闇の中で苦笑した。こんなことはめったにない。つきにつきまくり、まるで賽ノ目が彼の意中を測ったように出た。主膳自身が信じられないくらいの今夜のつきであった。

駒札を金に換えるとき、寺箱の近くに屯していた数人の浪人がいやな目つきで主膳の方を見

ていた。いずれも荒(すさ)んだ気配を十分身に沁み込ませた年季の入った浪人者ばかりである。猛犬のような殺気が身辺に立ちこめている連中である。

あの連中を数人同時に敵にまわすとなると主膳にも自信はない。彼らが身に帯びた殺気は、道場剣法で培(つちか)ったものではない。実戦でたっぷりと血を浴びて身につけたものだ。それがわかる主膳も、同じような血の匂いを身体に塗(まぶ)していることになる。

おとなしく金を渡してしまえば、命は許してもらえるかもしれぬ。主膳にとって大金とはいえ、十両足らずの金である。だが主膳にはそうする気持は毫(ごう)もなかった。死に損(そこな)った命、いつ死んでも惜しくはない。賭場の賭金(テラ)を争って死ぬのもおれらしい死に方かもしれぬ。

主膳が自嘲の笑いに頬を歪(ゆが)めたとき、背後の足音が間隔を縮めてきた。道は松浦肥前守邸の塀沿いに西へ向かっている。この先は大川端に出る。左へ行けば酒井下野守の邸前を通って両国橋の東の袂(たもと)に出る。右に行けば、大川に沿って小さな武家屋敷や寺社が散在する寂しい道がつづく。

両国橋へ出れば、まだ多少人通りがあるだろうから、そちらへ行くにしてもそろそろ決着をつけようとして来たのにちがいない。

大川端へ出たところで、背後の足音が一気に距離を縮めてきた。それを承知で敢えて逃げようとはしない。戦って必ず勝てるという自信はないが、逃げるのは面倒という心理である。

「待て」

背後に迫った人影が声をかけた。ゆっくりと振り向いて闇の中の人影を数える。その数を四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つと数えてから、
「待てと言うのはおれのことか」
と反問した。
「ふん、お主以外にだれがいるか」
人影は闇の中でうっそりと笑ったようである。闇に同化したような人影から尋常ではない殺気が放射されてくる。いずれも並の遣い手ではないのがわかった。
「おれになんの用かな」
主膳はさりげなく足場を選びながら尋ね返した。
「言われなくともわかっておろう。無駄な血は流したくない。お主の懐ろの中のものを渡してもらおうか」
人影の一人は居合いを使うとみえてゆっくりと間合いを詰めてくる。
「なぜ、お主に渡さなければならんのかな」
「それがわからんお主でもあるまい。かなりの遣い手とみたが、お主に勝ち目はない。さ、おとなしく渡してもらおう」
「これは理不尽な。この金はおれが稼いだものだ。べつにいかさまをしたわけでもないぞ」
「聞き分けのない男よの。無駄な血を流したくないと言ったはずだ」
「無駄な血とは、お主らの血のことか」
「止むを得まい。やる気だな」

敵はリーダー格を先頭に立てて左右に散開した。主膳は大川の流れを背負って身構えた。川の方角から吹いて来る風が生ぐさいようである。

左右の敵が抜刀した。だが正面の敵は刀の柄に手をかけたまま、じりじりと間合いを縮めている。壁のように厚く重い構えである。

主膳はその重さに圧倒されて後じさった。左右の敵も尋常ではない遣い手であることがわかったが、視野に入れる余裕がない。目の前の敵に立ち向かうのが精いっぱいで、たしかに視野にありながら見えないのである。

じりじりと退りつづけて、水際へ追いつめられた。もはや一歩もさがれない。岸辺の芦の葉が風に騒いだ。このあたりに自生する芦は風向の具合で片葉である。本所七不思議の一つに数えられる「片葉の芦」が血の匂いを乗せて一斉に騒めき立った。芦の葉かげに対岸の疎らな灯が揺れる。

（来る）

実った剣機を全身に感知したとき、空気を切り裂く気配と共に凄まじい殺気が迸った。避けも躱しもならない。主膳は自らの剣を抜きながら前へ出た。二条の白刃が闇の中にからみ合って火花を発したようである。

一瞬の刃合わせによって二人の位置が代った。主膳は全身から放電したかのように立っていられないほどの疲労をおぼえた。身体のどこかを斬られたようだが、確かめる前に左右の敵がしかけて来た。

どのように躱したか憶えていない。うなりをあげて迫る刀風の下をかい潜り、左右に剣を振った。同時に打ち込んで来たように見えても、同士討ちを恐れた敵の動きにわずかな前後があった。それが主膳の命を救った。そのわずかな間隙を見切った剣尖に手応えがあり、熱い血が面にはねかかった。夜風に血の匂いが振り撒かれた。

全身の力を使い尽した主膳は片膝を突き、身体のバランスを地上に剣を突いて支えた。息が切れて呼吸が追いつかない。敵が追い打ちをかけてくればもう防ぐ力は残されていない。

そのとき背後に水音が立ち、左右の人影が傾きながら地に伏した。束の間の手合わせだったが、時間が凍りついたように感じられた。水中に沈んだ敵と、地上に倒れた敵が動かないと知って、初めて左肘に鋭い痛みが走り、全身から汗がどっと噴き出した。だが直ちにその汗が凍りついた。

敵影を四つ数えたことをおもいだしたのである。いまの凄まじい決闘に意識を集めて第四の敵の存在を忘れていた。いや忘れていたと言うより、意識の中に入れる余裕がなかった。

だがもはや第四の敵に対応すべき一触の力も残されていない。いまなら女、子供が脇差しを構えて突きかけて来ても躱すことはできまい。ましてや第四の敵は三人の仲間の背後からいまの対決をじっと見守っていたところをみても一筋縄の相手ではなさそうである。

朽木主膳、捨て損った命をいまここに捨てるか。それもよかろう。――主膳は、闇の奥に潜んでいる敵に対して無防備な身体を晒した。だが敵はいっこうにしかけてくる気配がない。

早くしかけなければ主膳が体力を回復してしまう。いまの立ち合いで主膳の恐るべき腕をと

っくりと見届けたはずである。練達な敵なら息継ぐ間もあたえず追撃してくるにちがいない。それが二呼吸も三呼吸もする間をあたえている。

なぜ来ないか？　主膳は気息を整えながら上体を立て直した。来い。来るならいまだぞ。主膳は闇の奥をうかがった。

「見事なお腕前でござんすねえ」

突然闇の奥から声が湧いた。それは主膳が見当をつけていた方角とはまったくべつの闇の溜りから湧いて来た。ぎょっとして声の方角に慌てて剣と姿勢を転じた。それだけですでに一拍の遅れがある。敵が黙って打ちかけて来れば、その遅れが生死の境になったはずである。闇の奥に同化して気配を感じさせなかったのは、只者ではない。

「おっと。あっしは旦那と戦うつもりはござんせんや。三人の用心棒が束になってかかってもかなわねえ旦那に一騎討ちを挑むほど、私（あっし）は命知らずじゃござんせん」

言葉使いからして武士ではない。

「何者だ」

主膳は声の方角に剣尖を向けたまま身構えた。体力が最小限に回復している。

「名乗るほどの者ではござんせん。旦那が斬った浪人の一味で」

声の主の輪郭が闇の中に薄く浮かんできた。細身の町人体の男である。声の質は若い。

「ならばなぜ来ぬか」

「只今申し上げやした。命が惜しいからねえ」

のどの奥でくくと笑ったようである。命が惜しいと言いながら、侍など少しも恐れていないらしい。仲間三人を目の前で斬り殺されながら口調が落ち着きはらっている。おそらく顔色一つ変えていないだろう。

「ならばなぜ立ち去らぬか」

「へ、旦那にお願いがありやして」

「懐中の金を返して欲しくば、相手になろう」

「とんでもねえ。実はその逆で」

「その逆だと」

「旦那が願いを聞いてくだされば、失礼ですが懐ろの中身の倍くらいはすぐ差し上げやす」

「どういうことだ」

第四の人影に敵意がないのを確かめた主膳は剣を引いた。だがまだ身構えは解いていない。相手がどんな技を秘めているかわからないからである。

「旦那はあっしの用心棒を三人も斬っちまいやした」

「そちらから仕掛けたことではないか。斬らねばおれが斬られた」

いまの三対一の死闘をおもいだしただけで冷たい汗が噴き出て来る。生き残れたのが信じられないくらいの遣い手揃いだった。

「いえ、驚いているのでござんすよ。旦那が斬った三人、これまで後れを取ったことはありやせん。それを旦那はあっという間に片づけてしまいやした。凄いお腕前でさあ。つくづく江戸

は広いとおもいやした」
「なにを言いたいのだ」
「旦那、いかがでござんしょう。旦那が斬った三人の穴埋めをしちゃあもらえやせんか」
「穴埋めだと」
「これもなにかの縁でやしょう。旦那の腕に惚れやした」
「つまり三人の代りに賭場の用心棒になれということか」
「そういうこって、へい。旦那があっしの願いを聞いてくだされば、斬られた三人分の雇い料をお支払いしてもよろしいんで」
「三人分か。気前のいい話だな」
主膳は心を動かされた。選り好みを言っていられる身分ではなかった。大量の浪人が犇(ひしめ)き合っている江戸で口にありつけるのは幸運である。しかも用心棒代を三人分出すという。
「旦那はそれだけの腕をおもちで」
「おれを斬った者が現われたらどうする」
「旦那の二倍も払いやしょうか」
ぞっとするような冷たい声の響きである。
「その話に乗ろう」
用心棒で死に損った身である。賭場の送り狼とはむしろ格好の再就職口であった。
「やっぱりあっしが見込んだ通りだ。話が早いや。あっしは小吉と申しやす。江戸の闇賭場を

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com